

片桐洋一編

拾遺和歌集

校異篇

古典文庫

片桐洋一編

拾遺和歌集

校異篇

古典文庫

古典文庫第二〇七冊

昭和三十九年十月二十日 印刷発行

©

(非売品)

拾遺和歌集

校異篇

編者 片桐 洋一

発行者 吉田 幸一

印刷者 東京都板橋区熊野町三四
帝都印刷製本株式会社

発行所 東京都(王子局区内)
北区西ヶ原町三ノ三四

古典文庫

電(九一九)二七一七
振替口座東京一四五九七番

校異篇凡例

一、本書は定家自筆天福本を中院通茂が厳密に臨写した本の翻刻である、古典文庫「拾遺和歌集定家本」上下二冊を底本として、現存する主要伝本の異同を示したものである。

二、拾遺集の現存伝本は、その九割以上が定家筆天福本の系統であり、その本文は少異はあつても大差なく、しかも定家本解説に示したように、底本により、ほぼ完全に祖本たる定家自筆本の姿が復元されるので、これら末流の天福本の比較は最少限にとどめその大半は省略した。ただ、二条家に伝つた天福本として圧倒的に正しい本文を持つ宮内庁書陵部蔵東常縁筆本、二条家流天福本の独自本文を代表する尊経閣文庫蔵伝浄弁筆本、二条家から飛鳥井家に伝わりその後禁裡でも重んぜられた二条為重本系を代表させて、京都大学図書館蔵の菊亭伊季所蔵本と、その同系異本と考えられる早稲田大学図書館蔵の甘露寺親長筆

本を、その特異な本文のゆえに異同を掲げた。

三、天福本以外の定家本については、從來全く紹介されたことがなかつた貞応二年本を、京都大学図書館蔵冷泉為滿筆本によつて比較した他、無年号本の一つとして、架蔵の正平七年藤原為秀奥書本の異同を掲げた。また、天福本の奥書を持つものの、内容は明らかにそれと異なる岩国吉川家蔵、徳治三年藤原為相奥書本、同じく天福本の奥書を持つが貞応元年本などとの混合本であるらしい国立国会図書館本、さらに天福の奥書はないが浄弁本以下の二条家流天福本と著しい共通点を持つ二条為世筆本臨写の近衛基熙筆陽明文庫本の異同を示し定家本の展開を考究する資とした。なお、これら定家本に関しては、本文篇下卷所収の解説「定家本拾遺和歌集について」を参照せられたい。

四、定家本に対立する、いわゆる異本系統については現存主要伝本のすべての校異を示した。これらについては、本巻巻末所収の解説「拾遺和歌集の異本について」を参照せられたい。

五、本書の底本及び比較に用いた諸本とその略号は次の通りである。

定家本系統

(A)天福二年本系

(イ)冷泉家本

(底本) 中院通茂臨写定家
自筆本

京都大学図書館蔵

(ロ)二条家本

常 東常縁筆本

宮内庁書陵部蔵

浄 伝浄弁筆本

尊経閣文庫蔵

(ハ)為重本

為 二条為重奥書菊
亭伊季所持本

京都大学図書館蔵

為朱 同本朱注定家自筆本

雅 同本所引飛鳥井雅康本

親 甘露寺親長筆本

早稲田大学図書館蔵

(B) 貞応二年本系

貞 冷泉為滿筆本

京都大学図書館蔵

(C) その他の定家本

陽 近衛基瀨筆陽明文庫本

陽明文庫蔵

吉 吉川家為相奥書本

岩国吉川家蔵

国 国会図書館本

国立国会図書館蔵

片 架蔵為秀奥書本

片桐洋一蔵

異本系統

(A) 異本第一系

堀 堀川宰相具世筆本

宮内庁書陵部蔵

天甲 天理図書館甲本

天理図書館蔵

天乙 天理図書館乙本

天理図書館蔵

多 多久図書館本

佐賀県多久市立図書館蔵

(B) 異本第二系

田 北野天満宮本

京都北野天満宮蔵

六、版行の都合もあつて、字体、仮名遣い等の相違は一切掲げないことにした。中世以後の写本について仮名遣いの相違、字体の相違まで掲げても無意味であるし、またそれをあえてしても、その一切を完全に活字化することが不可能だからである。校本とは畢竟辞書的なものであり、その本の用字法や仮名遣いについて論及する学者であれば、直接に原写本を見ない筈はあるまいと考えたからである。

従つて、「大中臣能宣」と「能宣」の相違はわかるが、「大中臣能宣」と「大中臣よしのふ」、あるいは「能宣」と「よしのふ」の相違は本書ではわからない。但し、「躬恒」「三常」「定文」「貞文」など特殊なものはすべてあげた他、底本に「め」とあるに対し、一本「妻」（筆者注「メ」とよむ）とあるがごとく、あるいは「夜ともに」「世とともに」「よとともに」のごとく、意味に関連す

るものはすべて校異を示した。

七、底本には、墨と朱の訂正が施されているが、校異を掲げる場合は、すべて訂正された本文を基準とした。従つて、底本に「かりにのみ」とある場合は、「かりにとて」を正しとし、それ以外の本文は「かりにのみ」を含めて、すべて校異として掲げた。

八、校異に用いた本文の見せ消ち、書き入れは、すべて（ ）の中に記した。

九、為重本朱注、及び為重本書入の雅康本は書入れであるため、為重本と異なる本文の場合しか掲げられていないので注意されたい。

十、貴重な蔵書の閲覧、調査をお許しただいた公私図書館を始めとして多くの諸先賢の御厚情によつて本書は成つた。御尊名はここに一一列記し申し上げぬが、心から御礼申上げる次第である。

拾遺和歌集（校異篇）目次

校異篇凡例……………	一
校異（二——二、三五）……………	九
校異篇解説（拾遺和歌集の異本について）……………	一九七
底本正誤一覽表……………	二三二

○春―春部廻

一 平―平の廻 △さたふん―貞文貞国廻―定文廻 天甲 天乙 多 △家哥合―家の哥合陽

為朱吉廻 天甲 多 廻 △よみ侍ける―よめる吉―よめる（よみ侍ける）常

二 時の―時為 天乙 廻 △のうた―に廻 天甲 多 廻

三 かすかの―かすみの廻

四 冷泉院―冷泉院の廻 天甲 天乙 多 廻 △東宮に―東宮にて廻 天甲 天乙 多 △おはしまし

ける時―をはしける時廻 △哥たてまつれと―たちわきのをさにてさふらひける時

百首哥よみたてまつれと廻―帯刀の長ひとにて侍ひけるととき百首よみたてまつれと

天乙―たちはきのをさひとにさふらひけるととき百首よみたてまつれと 天甲―帯刀の

長に侍けるととき百首よみたてまつれと 多 △おほせられければ―ありけるに廻

五 月次―月次の吉廻 天甲 天乙 多 廻

六 御時―御時の吉廻 天甲 廻

▽ 六の次に三「亭子院哥合に これのり はなの色をうつしとくめよかみ山はるより

のちの影やみゆると」廻

七 平祐拳―祐拳 天甲 天乙 △あしたの原の雪見れは―あしたの原を見わたせは吉

ハ　さたふんか―貞文家吉貞―定文家国[天乙]多―貞文か家[天]△家―家の雅[天甲]△

猶―また[天]△とそ見る―とそ思ふ[天甲]天乙多△みつね―凡河内躬恒吉[天乙]△

△梅花―梅のはな雅

九　花とこそ見れ―花かとそ見る[天乙]△

一〇　内裏―内裏に[天甲]天乙多△哥合に―哥合せさせ給ける時[天乙]多―哥合せさせ給

けるに[天]―哥合をせさせ給ける時[天甲]△中納言朝忠―中納朝忠浄―中納言朝忠卿[天]

[多]―権中納言藤原朝忠(イ敦忠)[天]―作者名ナシ[天乙]

三　柿本人麿―柿本人丸為親片[天甲]天乙多[天]

三　たてまつれる哥の中に―哥たてまつりけるなかに[天甲]天乙多[天]△つらゆき―紀貫

之吉[天甲]天乙多[天]△白雪の―白雪は[天甲]天乙多[天]

四　御時―御時の[天]△みつね―凡河内躬恒[天甲]天乙多[天]

一五　冷泉院―冷泉院の[天]―冷泉院の御時[天甲]天乙多△のゑに―に[天]△家に―所に[天]

[天甲]天乙多△まらうときたる―まち(らい)うときたる陽―客きたるかたある[多]―客

来かたある[天甲]天乙△所―所に[天甲]天乙―所を[多]△きませる―きまさぬ[天乙]

▽　一五の次三「題不知　読人不知　梅の花よそなからみむわきも子かとかむはかりのかに

もこそしめ」堀天甲天乙多

一六 齋院―齋院の吉片堀天甲多北 △御―ナシ北 △みつね―凡河内躬恒堀天乙多 △梅

花―むめのはな北

一七 すみ―ナシ堀天甲天乙多 △前―さきの堀北 △齋院―齋院の吉堀北 △屏風に―屏

風片天甲多 △つらゆき―平（紀敷）つらゆき堀―平兼盛天甲多―かねもり北―つら

ゆき（行間書入）陽 △わきそかねつる―わきそかねぬる片

一八 人麿―柿本人丸堀天甲天乙多―人丸親為浄片国 △やくめる―やくなる堀天甲多

一九 恒佐―つねすけの天甲北 △つらゆき―紀貫之堀天甲天乙多

▽ 二〇の次二〇八題不知 中納言安倍広庭「いにし年ねこしてうへし我やとのわか木の梅は

花さきにけり」堀天甲天乙多

二〇 詞書ナシ天甲天乙多

二三 詞書―大皇太后宮の内侍とてさふらひける人なくなりには醍醐のみかと御前にさ

ふらひける人に五葉の松にうくひすのなきけるをかれよめとおほせことありければつ

かうまつりける堀天甲天乙―太皇太后の内侍とてさふらひける人のわらはなりける時

醍醐の御門の御前なりける五葉に鶯のなきければ正月はつねになむありける日つかう

まつりける多 △なきければ―なきけるを丑 △正月はつねの日―かれよめとおほせ

られければ丑 △つかうまつりける―つかうまつれる国貞 △の日とは―の人は丑

三 たゝみね―壬生忠岑吉丑 天甲 天乙 多

四 みこの―親王の丑―宮丑 天甲 天乙 多 △所に―時丑―時に 天甲 天乙 多―ところにて

丑 △かきれる―契れる丑

▽ 五の次六「天暦の御時のうたあはせに 源順 春ふかみいてのかはなみたちかへり見

てこそゆかめやまふきのはな」丑

五 延喜―延喜の 天甲 △御時―ナシ丑 天甲 天乙 △御屏風―屏風多△水のほとりに―み

つのへむに丑 天甲―水辺に吉多 △梅花―むめのはなの丑 △見たる所―ひらけたる

所丑 天甲 天乙―ひらけたるところに多丑 △つらゆき―紀貫之丑 天甲 天乙 多

▽ 五の次六「題不知 大和守藤原永平朝臣 袖たれていさ我そのに鶯のこつたひ散らす

梅の花みに」丑 天甲 天乙 多（但し「大和守藤原」△天乙▽「わかやとに」△多▽）

六 題しらす―ナシ丑 天甲 天乙 多丑 △のへの―かたの丑 天甲 天乙 多丑

七 五ノ次ニアリ丑 天甲 天乙 多

六 作者名―大和守藤原永平丑 △そのに―やとに丑 ▽コノ位置ニナシ五ノ次丑 天甲

〔天乙〕多 △見む―みに浄

三 みつね―凡河内躬恒吉囙〔天甲〕〔天乙〕多 △かは―かけ囙

〔北〕

三 あたにちらすな―風に散すな囙〔天乙〕―かせにしらすな多 △大中臣能宣―よしのふ吉

三 よるにそ―よるこそ囙〔天乙〕多 △みたれそめける―みたれそめけれ囙〔天乙〕多

三 屏風に―屏風囙〔天乙〕 △大中臣能宣―能宣吉北

三 凡河内躬恒―みつね北

三 詞書―題不知〔天乙〕 △ゆけとも―くれとも囙〔天甲〕〔天乙〕―きつれと北 △くる人―よる

人囙〔天甲〕〔天乙〕北 △ナシ片

三 まかり―ナシ吉囙〔天甲〕〔天乙〕多北

三 下句ヨリ脱丁〔天甲〕

三 天曆九年―天曆九年二月廿九日囙〔天乙〕多北 △内裏―内裏の囙〔天乙〕北 △哥合に―哥

合多 △よそにても―よそなから囙〔天乙〕北 △脱丁〔天甲〕

三 脱丁〔天甲〕

四 の中―中貞浄陽国囙〔天乙〕多北 △脱丁〔天甲〕

四 脱丁〔天甲〕

三 詞書マデ脱丁^{天甲} △詞書―天曆御時哥合に^北 △天曆―天曆の吉

三 家の―家^{天甲}^北 △さたふんが―さた文吉^国 △たゝみね―壬生忠岑吉^堀^{天甲}^{天乙}^多

▽ 三の次に三重出ス「亭子院哥合に 是則 花の色うか（う）つしとゝめよかゝみ山春より後のかけやみゆると」^堀

四 賀―賀の^北 △御屏風に―屏風に^堀^{天甲}^{天乙}^北―屏風^多 △藤原千景―藤原千蔭^堀

^{天乙}―藤千景^多

五 天曆―天曆の吉 △御時―御時の^堀^多^北 △御屏風―屏風^堀^{天乙}―屏風に^{天甲}―御屏

風に吉為^北 △たゝ見―壬生忠岑^堀^{天甲}^{天乙}^多―みふのたゝみね^北―たゝみね片―壬生忠見吉 △山田なれとも―あらたなれとも^堀^{天甲}^{天乙}^北―あしたなれとも^多

六 山田の―あまたの^堀

七 中宮の―中宮^堀 △時の―時^多^北 △賀し給ける時の―賀しける時の親―賀の吉 △

屏風に―屏風^北

八 朝臣―朝臣の^堀^{天甲}^北 △家の―家浄国^北 △屏風に―屏風^堀^{天甲} △つらゆき―紀

貫之^堀^{天甲}^{天乙}^多

九 齋院―齋院の貞片^堀^{天甲}^{天乙}^多^北 △所―ところを^堀^{天甲}^多^北 △きかまほしきを―